

西国第二十五番 御嶽山

御本尊／十一面千手観世音菩薩 開基／法道仙人

天台宗 播州清水寺

慈悲の道

山主 清水谷 善誠

今をさかのぼること1300年

余り前の、養老二年（718）のこと、大和国西国第八番長谷寺の開山「徳道上人」は病のため仮死状態になって、冥土の閻魔大王より「生前に悪事を働き、地獄へ送られて来るものが多いのは困りものである。ついては、娑婆世界には三十三のありがたい観音様のおわす霊場がある。その霊場を一巡するものには地獄堕ちしないことを約する。」として、世間の人々に三十三の観音霊場巡礼を広く伝えるよう命じられ、起請文と巡礼の

証となる三十三の御宝印を授けら

れて、この世に戻されたと伝えられています。上人が三十三所の観音霊場を世に広めるべく、自ら最初の巡礼者となられたことは言うまでもありません。

この逸話こそが、優に1300年の歴史を誇る、西国三十三所観音霊場の草創を物語るものであり、我が国における、巡礼文化の嚆矢を飾るものなのです。

そもそも、三十三という数字の由来は「法華経」、くわしくは「妙法蓮華経」の「観世音菩薩普門品

第二十五」（「観音経」）には、観音がさまざまな身分や職業、仏教の護法神などに身を変えて、衆生の救済に当たられることが説かれており、それを整理致しますと三十三になるところから三十三の観音様の霊場が定められました。

観音経には人々の心の悩みや苦しみを救うことが説かれています。いつ、いかなる困難に出会っても観音さまは慈悲のころでもって人々を見守って下さり、一心に「南無観世音菩薩」と、その御名をおとなえし、観音様の慈悲のお力を心に念ずれば、ただちにその声に応じてくださいます。

慈悲の心と言いますと、「抜苦与楽」、すなわち、観音さまが我々生きとし生けるもののくるしみを取り除き、安楽を与えてくださることを意味します。

私たちは今、物の豊かな時代に生活し、さまざまな歴史や文化を背景とした異なる価値観が交錯し、急速に変わりゆく現代社会の中で、忙しい毎日を生きながら、国や時代を問わず、幸せな生活を願いながらも、不安な気持ちをかかえています。

このような時にこそ、西国三十

三所の観音さまにお参りをし、手を合わせることによって、心の中に波立つさまざまなくるしみや悩みがしずまり、自分自身を見つめ直し、人を思いやる慈しみの気持ちを持つようになり「現世安穩」、そして、観音さまのお前では心をひらくことによって、それぞれの人生をふりかえり、心を洗い清めれば、極楽往生の一步となることでしょう。

ひとりでも多くのかたに観音さまとご縁を結んでいただき、しあわせで心安らかな人生をお過ごしただけますよう祈念致します。

